# アジア地域における高度人材の国際移動

## ―グローバリゼーションの逆説的帰結としてのクラスター化とリージョナル化―

名古屋産業大学　松下奈美子

1. 目的

本報告の目的は、なぜ高度人材の国際的な労働市場はある特定の集団同士の競争によってクラスター化するのかという問いと、高度人材の国際移動の方向性はグローバルではなくリージョナル化するのかという二つの問いを社会学的に明らかにするものである。21 世紀は科学技術の飛躍的な進歩により、知識基盤型社会になるということは多くの経済学者が予見していた。彼らはグローバリゼーションが進んだ知識基盤社会では高付加価値をいかに創造できるかが競争力の源となり、グローバル経済を主導する「高度人材」が国境を越えて自由自在に移動すると主張した。新古典派経済学者らの人的資本理論に基づく「高度人材の国際移動」の必然性、必要性のロジックは、先進国の移民政策、雇用政策、高等教育政策に対して、現実的に大きな影響力を持っている。しかし高度人材の国際移動の実態を各国の事例ごとに観察すると、従来の通説では説明できない多くの事象が散見される。特に IT 技術者の国際移動の現実は、個人ではなく集団の移動であり、その方向もグローバルな全方位への移動ではなく、特定地域への方向に向かっている。高度人材の国際移動の実像は、従来の経済学的視点に基づくミクロな個人の全方位な移動が行われるとする通説が主張する姿とは大きく異なっているのではないかというのが本報告の問題意識であり、より現実に即した説明枠組みが必要である。

2. 方法

なぜ高度人材の移動が個人単位の移動ではなく集団での移動になり、その移動が特定の地域へと向かうのかということを明らかにするために、社会的地位集団（social status group）というコリンズやマーフィの概念をもとに、高度人材の労働市場におけるポジション獲得競争は閉鎖的な空間で限られた雇用のパイを奪い合う地位簒奪競争であると考え、なぜ地位集団間の競争になるのかを分析した。社会的地位集団を形成する主な要素は言語、国籍、エスニシティ、学歴などであるが、中でも言語と学歴に着目し、ヨーロッパ、アメリカ、アジアの 3 地域で IT 技術者を中心とした高度人材がどのような国際移動を行っているのかを検証した。

3. 結論

その結果、アメリカやイギリスのような英語圏にはインドのような英語圏出身者の移動が中心であり、非英語圏である日本やドイツに移動してくる高度人材の多くは非英語圏出身者であり、中でも近隣からの移動が中心であった。特に日本の場合はアジア地域出身者が 9 割を超えていた。これは言語的障壁が高度人材の国際移動にも生じているということである。また、インドや韓国のように高等教育を受けた人材を自国の労働市場で吸収しきれない場合、高度人材は海外の労働市場へと移動していることも明らかになった。このような移動の場合、個人の能力本位の競争ではなく、大卒であるという資格、社会的地位をもとに、その資格が本人の能力を担保していると社会が認識することにより資格をもとにした集団が形成され、その集団帰属競争が発生する。労働市場における地位獲得競争において上位の社会的地位集団が地位を占有することにより、高度人材のクラスター化が進み、移動の方向性も規定されることで、リージョナル化という現象が発生するのである。

4. 文献

Boeri, Tito,et.al, 2012, Brain Drain and Brain Gain: The Global Competition to Attract High-Skilled Migrants, Oxford University Press.

Brown, Phillip, 2000, The Globalisation of Positional Competition?, Sociology, Vol.34No.4, 633-653.

Raimond, Murphy,1988, Social Closure: the theory of the monopolization and excludion, Oxfor d University Press.